

多数派形成ゲームとしてのイラク選挙後危機：2010年3月国会選挙後の権力分有をめぐる合従連衡

山尾, 大
九州大学大学院比較社会文化研究院

<https://hdl.handle.net/2324/21942>

出版情報：中東研究. (510), pp.76-91, 2011-01-12. 財団法人中東調査会
バージョン：
権利関係：



中東研究

第 510 号 (2010/2011 Vol. Ⅲ)

【シリーズ：大使の見たままに】

市場開放経済体制に突き進むシリア	国枝 昌樹	3
イラクの現状と未来	小川 正二	7
カタールの現状と今後の日本の役割について	北爪 由紀夫	10
素顔のリビア ——或る大使の体験見聞録③	塩尻 宏	14

【特集：トルコを取り巻く国際関係】

トルコの内政変動と外交	内藤 正典	25
NATO と地中海・中東 ——MD、ICI の展開を中心に	広瀬 佳一	33
グルジア紛争後のトルコと南コーカサス諸国の関係 ——アルメニアとトルコの和解プロセスを中心に	廣瀬 陽子	42
イラン・トルコ関係の現状と展望	佐藤 秀信	55
シリアの外交・経済戦略から見るトルコの位置づけ	高岡 豊	62

【中東和平についての日本の立場】		71
------------------	--	----

【最近の動向】

多数派形成ゲームとしてのイラク選挙後危機 ——2010 年 3 月国会選挙後の権力分有をめぐる合従連衡	山尾 大	76
レバノン政治とパレスチナ人の就労問題 ——2010 年の法規制緩和と帰化をめぐる議論	錦田 愛子	92
オマーン議会の動向 ——制度の現状と第 6 期(2007-2011)の活動を中心に	近藤 洋平	101
米国の対イスラエル武器輸出 ——その特殊性と潜在的問題	齊藤 孝祐	112

【中東を理解する為の書籍案内】	小早川 敏彦	118
-----------------	--------	-----

多数派形成ゲームとしてのイラク選挙後危機 ——2010年3月国会選挙後の権力分有をめぐる合従連衡——

山尾 大

I. はじめに

2010年3月7日に実施された国会選挙から7カ月が経過した10月、あるイラク国内紙は、政府不在の期間がオランダを抜いて世界記録を更新したと報じた[N 1 Oct 2010]。その後も、イラクはこの不名誉な記録を更新し続けた。11月11日の国会で大統領・首相・国会議長が選出され、11月25日にマリーキーを首班とする組閣が正式に命じられるまで、実に8カ月以上も正式な政府の不在状態が続いたのである。

今回の国会選挙では、第1党となったアッラーウィー率いるイラーキーヤが91議席、第2党のマリーキー首相率いる法治国家同盟が89議席、第3党のイラク国民同盟（以下、INA）が70議席、第4党のクルド同盟が43議席と、主要4政党連合が総議席の約9割を占めたが、いずれの政党連合も過半数（325議席中163議席）には遠く及ばなかった（図表1）。こうした票の分散は、新政権の形成を困難にし、多数派形成のために政党連合の再編を繰り返す政治ゲームに帰結した。2005年12月の国会選挙（約5カ月）以上に新政権形成の交渉に時間がかかった背景には、以上のような票の分散があった。

【図表1：主要政党連合の性格と加盟政党、獲得議席数】

政党連合	加盟政党	性格	議席数
法治国家同盟 (SLA)	ダアワ党(N.マリーキー)	ダアワ党を中心とする政党連合。ナショナリズムと中央集権に基づく国家運営、脱宗派主義、旧バース党勢力の排除を主張。	n.a. 89
イラク国民同盟 (INA)	ISCT(A.ハキーム)	シーア派イスラーム主義色が強い。	8
	サドル派(M.サドル)	ナショナリズムと旧バース党勢力の排除を主張。地元勢力に強い支持基盤を持つ。	36
	国民改革潮流(I.ジャアファリー)	I.ジャアファリーを中心とする勢力。	3
イラーキーヤ (IRQY)	イラク・リスト(I.アッラーウィー)	I.アッラーウィーを中心とする世俗主義、リベラル派。	27
	改新リスト(T.ハーシミー)	元イスラーム党の幹部が中心。	7
	対話戦線(S.ムトラク)	旧バース党の軍人を中心とする世俗派。	16
	ハドゥッバー(U.ヌジャイフィー)	ニーナワー県を主たる基盤とするスンナ派中心の勢力。係争地問題で対クルド強硬姿勢をとる。	9
	国民未来集団(R.イーサーウィー)	元イスラーム党の幹部中心、アンバール県に基盤を持つ。	8
クルド同盟 (KA)	改革と開発(カルブリー)	元イスラーム党の幹部中心。	12
	クルディスタン民主党(KDP)	イルビールに基盤を持つクルド民族主義勢力。	n.a.
	クルディスタン愛国同盟(PUK)	スライマーニーヤに基盤を持つクルド民族主義勢力。	n.a.
			43

政党連合	加盟政党	性格	議席数
イラク合意戦線	イラク・イスラーム党	スンナ派のイスラーム主義勢力。	n.a. 6
イラク統一同盟	立憲党、憲章集団	ボラーニー内相とAGサーマッラーイーを中心とする勢力。	n.a. 4

(出所) イラク独立選挙管理委員会 (<http://www.ihec.iq/Arabic/>) および各種報道をもとに、筆者作成。

多数派形成のための合従連衡は、突き詰めて言えば、民意からかけ離れた政治エリートとのゲームに過ぎない。しかし、どのような利害を持って合従連衡が行われたか、そのプロセスを精査することは、新政権の今後の政治運営、ひいてはイラク政治の行方を分析するうえで、極めて重要な意味を持っている。

以上のような問題意識に立ち、本稿では、3月の国会選挙後に新政権の形成が8カ月以上も遅れたのはなぜかという問題を、政党連合による多数派形成のための合従連衡のプロセスに着目して明らかにする。また、合従連衡を経て合意された新政権が、いかなる特徴を持っているのか、その性格を分析する。

本稿は、次のように論を進める。第II節で、国会選挙が行われた3月から組閣のめどが立った11月までの約8カ月間を、政党の合従連衡に着目して三つの時期に区分し、連合再編のプロセスを整理する（本稿執筆段階で組閣は完了していない）。第III節では、前節の合従連衡のプロセスをもとに、なぜ新政権の形成にこれほどの遅れが生じたのかを分析し、それを踏まえて新政権の特徴を整理する。

II. 多数派形成ゲームの展開——選挙後危機と合従連衡のポリティクス

1. 「シーア派同盟」再構築——テヘラン会議から国民同盟（3月20日～6月10日）

2010年3月20日に選挙結果が発表されてから、6月10日に法治国家同盟とINA（前政権下では同じ同盟であった）の連合が発表されるまでの約2カ月半は、選挙で分散した票を統合するべく、シーア派を中心とする勢力が再統合を試みた時期である（時期区分と略年表は、図表2）。

【図表2：選挙後の多数派形成ゲームと政党連合の再編】

月	日	時期区分	主要な政治の動き	政党連合のパターン
3	20	「シーア派同盟」の再構築	国会選挙の結果発表	SLA + INA 接近の模索
	29		第1回テヘラン会議	
4	2		サドル派が独自に首班指名の住民投票を実施	
	29		第2回テヘラン会議	
5	3		バグダード県の再開票実施	SLA + INA 接近の進展
	4		法治国家同盟とINA、元UIAの枠組で首班指名を行うことを合意	
	18		バグダード県再開票の結果発表。変更なし	
6	1		最高裁、選挙結果の最終承認(15日以内の国会委招聘規定)	SLA + INA 連合
	10		法治国家同盟とINA、戦略的連合のために「国民同盟」の形成発表	
	12		交渉の膠着化 第1回マリーキー、アッラーウィー会談	
	14	同盟の再編	第1回国会開催(30日以内に大統領任命規定)	IRQY、SLAに接近

月	日	時期区分	主要な政治の動き	政党連合のパターン
	29		第2回マールキー、アッラーウィー会談	
	14		通常国会を2週間延期決定(「憲政上の空白」の出現)	
7	17		ムクタダーとアッラーウィー、ダマスカスで会談	INA+IRQY 接近
	20		第3回マールキー、アッラーウィー会談	
	28		通常国会の無期限延期決定(「憲政上の空白」の拡大)	
8	8		外部介入の激化	SLA+KA 対、INA+IRQY
	19		米軍戦闘部隊撤退(31日完了宣言)	
	3		INA、首班指名をAマフディーにすることを公式に宣言	INA の分裂
	7		ジャアファリー、マールキー首班指名の支持を明言	
9	24		法治国家同盟の派遣団、テヘランでムクタダーと会談	
	27		サドル派がマールキー首相の首班指名を発表	INA の分裂の進行
	29		アッラーウィー、ダマスカスでアサド大統領にイランの影響排除を要請	
	1	新たな「2極構造」の出現	国民同盟、マールキー首相の首班指名を公式に発表	
	10		合意戦線と統一同盟が「中道連合」形成。マールキー首班指名の支持を発表。18日にはイラーキヤがAマフディー首班指名の支持を発表。	SLA+JFR+SDR+KAと、ISCI+IRQY の対立軸
	24		最高裁、7月28日以降の状況に違憲判決	
	8		イルビール会議開催	
11	11		国会開催、大統領、国会議長、首相が決定(新政権の形成に合意)	挙国一致内閣形成に合意
	25		ターラバーニー大統領、マールキー首相に正式に組閣を命じる	

(注) SLA (法治国家同盟)、INA (イラク国民同盟)、IRQY (イラーキヤ)、KA (クルド同盟)、TWFQ (イラク合意戦線)、IUA (イラク統一同盟)、SDR (サドル派)、JFR (国民改革潮流)を示す。

(出所) 各種報道をもとに、筆者作成。

選挙の結果、いずれの政党連合も過半数を獲得できないことが判明すると、各政党は即座に多数派形成のゲームを開始した。初めに動いたのは、隣国イランであった。イラン政府は、同じシーア派勢力の再統合を支援することで、自国の影響力を維持・拡大しようとするインセンティブを持っている。そこで同政府は、法治国家同盟とINAの幹部を招集し、3月29日に第1回テヘラン会議を開催した。もともと一つの同盟であった法治国家同盟とINAを再統合し、議会の多数派を形成しようというわけである。ところが、この再統合には、INA内で52.9%の議席を持つサドル派が強く反対した¹⁾。その背景には、マールキー政権が、サドル派民兵マフディー軍の掃討作戦(2008年3月)を実施したという事実があった。サドル派はそれ以降、マールキー政権を権威主義と批判し、マールキー首相率いる法治国家同盟の政権に強く反対してきたのである。テヘラン会議でも、サドル派は拘束中のマフディー軍の全員釈放を要請した[al-Hayāt 30 Mar 2010]。結果的に、法治国家同盟とINAの再統合の試みは、サドル派の強い反対で失敗に終わった[SA 31 Mar 2010]。

こうした「シーア派同盟」の再構築の動きに対して、第1党のイラーキヤは、選挙で示された民意を踏みにじる連合再編であると強く批判した。「テヘラン会議は、イランによる内政介入であり、イラーキヤを外して組閣を進めるのは民主主義へのクーデタだ」[Z 31 Mar 2010]、というわけだ。この背景には、国会の最大会派が首相を指名する権利を有するという憲法第76条の解釈をめぐる対立があった。アッラー

ウィーが、第1党のイラーキヤこそが首班指名の権利を持つと主張するのに対して、マールキー首相は選挙後の最大会派(つまり「シーア派同盟」)こそが首班指名の権利を有すると主張したのである。

さて、テヘラン会議で法治国家同盟との再統合を拒否したサドル派は、何らかの代替案を提示しなければならなかった。そこで、サドル派のナッサール・ルバイイー国会代表は、「新政権の首班指名に誰が適切かを決めるのは国民である」と主張し、4月2日にサドル派支持者を中心に首班指名候補の住民投票を実施した[al-Hayāt 1 Apr 2010]。住民投票は、国内4千か所で約140万人を対象に行われ、国民改革潮流のジャアファリーが1位(24%)、法治国家同盟のジャアファル・サドルが僅差で2位(23%)、マールキー首相は4位、アッラーウィーは5位という結果に終わった²⁾。したがって、サドル派は首班指名にジャアファリーを推すことを決定したと発表した[al-Hayāt 8 Apr 2010]。サドル派が独自に行ったこの住民投票は、後に同派の政策を転換させる要因の一つになる。だがこの時点では、サドル派は、独自に首班指名候補を提示することで、法治国家同盟との再統合に強く反対していた。

こうして「シーア派同盟」を再構築する試みが頓挫すると、最少勝利連合ではなく、四つの主要政党連合全てが大連立を形成する挙国一致内閣の構想が、選挙後の政治アリーナへ登場した。INA加盟のISCIのハミード・ムアッラ幹部は、全勢力が集結する円卓会議の開催を呼びかけた[DM 2 Apr 2010]。こうした挙国一致内閣形成論に乗じて、イラーキヤのウサーマ・ヌジャイフィー幹部が、マールキー首相と直接交渉を開始すると宣言した[Z 26 Apr 2010]。

これに危機感を持ったのは、挙国一致内閣論を提示したINA自身であった。INAとイラン政府は³⁾、INAを排除した法治国家同盟とイラーキヤの交渉を回避するために、4月29日、第2回テヘラン会議を開催した。だが、同会議においても、サドル派とマールキー首相の対立は解消できなかった。サドル派政治局幹部は、マフディー軍がシーア派聖地の治安管理権を獲得することを法治国家同盟との統合条件にしたが、マールキー首相は、既存の治安機関や覚醒評議会との権限配分は困難だとして、金曜礼拝時のハウザ警備権のみを譲渡すると返答した[al-Hayāt 28 Apr 2010]。交渉決裂を危惧したイラン政府は、サドル派に対して法治国家同盟との再統合を承認するように圧力をかけた[al-Hayāt 4 May 2010]。激しい議論の末、法治国家同盟とINAの再統合に向けた交渉を進め、両政党連合枠の組みで首班指名候補を出すという基本原則で合意した。その結果、法治国家同盟とINAは、首班指名候補の選定のための共同委員会を形成し、各7名の委員を出した[al-Hayāt 6 May 2010]。しかし、サドル派はこの時点でもマールキー首相の続投に反対しており、首班指名には共同委員会14名の8割の合意が必要であるという規定を設けることで、4人の委員枠を持つサドル派が拒否権を行使する余地を残した[al-Hayāt 2 Jun 2010]。

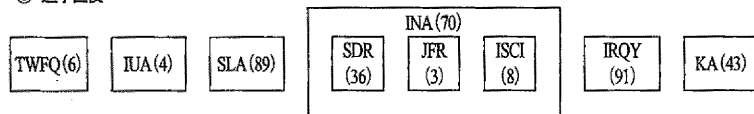
法治国家同盟とINAの交渉が一定の進展を見せるなかで、マールキー首相が選挙

後から要求し続けてきたバグダード県の再開票が行われ、5月16日には獲得議席数の変更なしとの結果が発表された。これを受けて、連邦最高裁は6月1日、最終的な選挙結果を正式に承認した[Z20 Apr 2010; *al-Hayāt* 17 May 2010; RD 2 Jun 2010]。各政党は、選挙結果が承認されると、15日以内に第1回国会を召集しなければならなくなった(憲法第54条)。

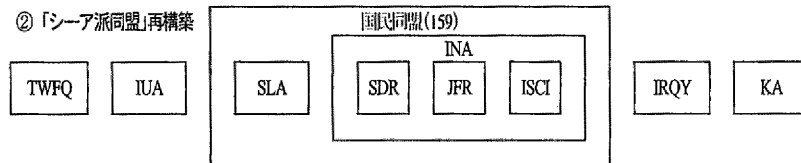
これを受けて、法治国家同盟とINAの交渉がさらなる進展をみせることとなった。第1回国会で多数派を形成することが喫緊の課題になったからである。その結果、6月10日には、法治国家同盟とINAが再統合し、国民同盟(al-Tahāluf al-Waṭānī)を形成することを発表した。決定打となったのは、2005年国会選挙前と同様に、宗教界最高権威のスイスターニー師であった。ISCIのアンマール・ハキーム議長は、ナジャフで同師と会談した後、INAと法治国家同盟の正式な統合を発表した[S 10 Jun 2010]。こうして選挙前の分裂によって票の分散を招いた法治国家同盟とINAは、再統合を果たし、国民同盟という「シーア派同盟」を再構築した。その結果、図表3に示した①から②の状態に連合が再編された。

【図表3：主要政党連合の連合組み替え】

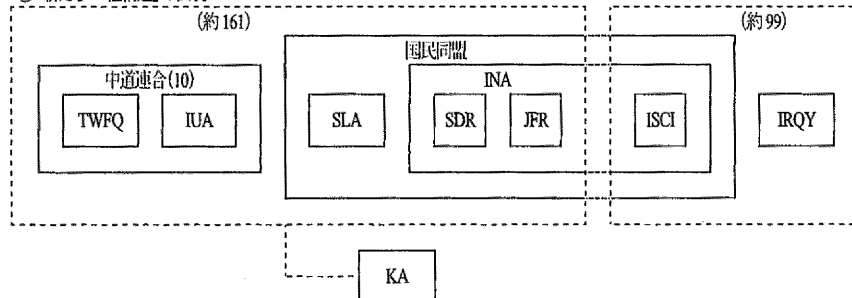
① 選挙直後



② 「シーア派同盟」再構築



③ 新たな「2極構造」の出現



(出所) 各種報道をもとに、筆者作成(政党の略字については、図表2の注を参照)。

再統合した国民同盟から首班指名候補を出すことが合意されると、次は誰をどのように選出するかが問題になる。そこで、二つの議論が生まれた。第1に、「パッケージ解決論」である。これは、首班指名候補の選定(つまり首相人事)と首相(府)の権限縮小をパッケージとして提案し、解決しようとする一連の議論で、選挙後一貫してマリーキー首相の続投を主張する法治国家同盟と、マリーキー首班指名を回避し、同時に首相の権限を縮小したいINAの間の交渉で生まれた。INAは、治安、経済、社会サービスの各分野で首相の権限を制限・縮小することを要求した[*al-Hayāt* 24 May 2010; DM 6 Jun 2010]。もしマリーキー首相の続投を認めなければならない場合、これまでの首相権限を大幅に縮小することが不可欠だ、というわけである。

第2に、「トロイカ体制論」である。これは、レバノンの制度を参照し、大統領、首相、国会議長という3ポストに権限を分散した相互監視システムを導入しようという一連の議論であり、これも首相権限の縮小論の一環として出現した。この時期には、大統領ポストをクルド同盟に、首相ポストを国民同盟に、国会議長ポストをイラーキーヤに、それぞれ配分することが議論されるようになった[*al-Hayāt* 22 May 2010]。

かくして、「シーア派同盟」の再構築にともなって、誰を首相に任命するかに加えて、どのように権限を配分するかという問題の解決が焦眉の課題となった。

2. 膠着化する交渉と同盟の再編——イラーキーヤの新戦略(6月11日～9月2日)

国民同盟の形成が発表されると、アッラーウィー率いるイラーキーヤは、「シーア派同盟」の再構築が、選挙の結果を無視したシーア派勢力による政権乗っ取りのための宗派主義だとの批判を展開した[RN 11 Jun 2010]。これ以降、9月初旬までの約3か月間は、一旦再統合した「シーア派同盟」内部で首班指名をめぐる交渉が膠着状態に陥り、それを打開するためにイラーキーヤと国民同盟の加盟政党が合従連衡を繰り返す、その結果、政局が混乱した時期である。具体的にみていこう。

国民同盟に対するイラーキーヤの批判が激化したさなかの6月14日、第1回国会が召集された。憲法の規定によると、第1回国会開催から30日以内に大統領を任命しなければならない(憲法第72条)。国民同盟はまず、首班指名をめぐる議論で進展を見せない14人の共同委員会を廃止し、代替組織に行政運営委員会を新設した[*al-Hayāt* 14 Jun 2010]⁴。サドル派のサラフ・ウバイディー政治局幹部は、「マリーキー首相の続投は認められず、ジャアファリーのような調整型の指名が適切だ」[*al-Hayāt* 20 Jun 2010]と原則論を提示したが、同時に国民同盟の首班指名の交渉が暗礁に乗り上げていることを認めた[DM 26 Jun 2010]。

こうした国民同盟内の交渉の膠着化は、新たな動きを生み出した。6月29日、マリーキー首相とアッラーウィーが第2回直接会談を行ったのである。それに先立って、国会開催直前の6月12日、アッラーウィーが首相府を訪問して第1回会談が行われたが、今回の会談では、マリーキー首相がアッラーウィーの事務所を訪問した。マー

リキー首相とアッラーウィーは、あくまでも自らの政党連合が主導する政権に固執し結局、連合形成と首班指名の合意はなされなかった [Z30 Jun 2010]。そもそも両者の間には、旧バアス党勢力を取り込んだ国民和解を主張するイラーキーヤに対して、旧バアス党勢力の排除に基づく国民統合を行おうとする法治国家同盟という対立軸がある [al-Hayāt 26 Oct 2010]。こうした対立を反映し、合意形成には失敗したが、法治国家同盟とイラーキーヤの本格的な交渉の開始は、「シーア派同盟」の破壊を試みたもので、INA の危機感を煽った。イラーキーヤが介入したことで、国民同盟の枠組みが瓦解する可能性が現実味を持つようになったからである [S4 1 Jul 2010]。

さらにこの危機感に拍車をかけたのが、米国の介入であった。ワシントンでイラク問題を担当するバイデン副大統領は、バグダードを訪問し、マーリキー首相とアッラーウィーの交渉開始を強く支持することを明確にした。マーリキー首相とアッラーウィーの権力分有体制を支援すると、初めて明言したのである [al-Hayāt 5 Jul 2010]。第1党のイラーキーヤと第2党の法治国家同盟の党首が権力分有体制を構築することこそが、選挙で表明された民意を反映する民主主義である、というわけだ。

これに背中を押されたのは、マーリキー首相であった。マーリキー首相は、国民同盟の首班指名が頓挫していることを受け、INA に対してこれ以上交渉が難航するようであれば、イラーキーヤとの連合を視野に入れた交渉を進めることを宣言した [S4 3 Jul 2010]。かくして、再構築された「シーア派同盟」の瓦解という可能性が現実味を帯びてきた。

だが、こうした流れに対し、INA も沈黙を守ったわけではない。サドル派幹部は、法治国家同盟と INA の連合である国民同盟全体の意向を無視してアッラーウィーと交渉を始めたマーリキー首相の姿勢を、反道徳的であり非合理的だと批判し、法治国家同盟との首班指名をめぐる交渉を停止することを宣言した [al-Hayāt 6 Jul 2010] ⁵。

政局の混乱が進むなかで、選挙後イラク政治にひとつの重大な転機が訪れた。それは、第1回国会開催から30日以内に大統領を指名するという憲法規定の遵守が不可能になり⁶、第2回国会の開催を2週間延期した(7月14日)結果、「憲政上の空白」が出現したことである。

法治国家同盟との交渉を停止した INA は、「憲政上の空白」に対処するために、今度はイラーキーヤと交渉を開始した。アッラーウィー、ターリク・ハーシミー副大統領などのイラーキーヤ幹部が、INA 幹部と直接会談を開始し [MN 15 Jul]、シリアのダマスカスではサドル派指導者のムクタダーとアッラーウィーが直接交渉を行った。両者は、国民和解政権の形成のために、INA とイラーキーヤの共同委員会を設置することで合意した [MT 20 Jul 2010]。

この合意を背景に、アッラーウィーがイラーキーヤの要求をマーリキー首相に叩きつけたのが、7月20日、首相府で行われた両者の第3回会談であった。同会談では、INA との交渉の進展を受けて強気になったアッラーウィーが、法治国家同盟に対して、

マーリキー首相の首班指名を撤回するように主張した [al-Hayāt 21 Jul 2010]。だが、この交渉も功を奏さず、7月28日には国会開催が無期限延期になり、「憲政上の空白」はさらに進行した。新政権形成の交渉は袋小路に陥っていた。

だが、INA とイラーキーヤは、マーリキー首相への圧力を止めなかった。INA 幹部は、近日中にイラーキーヤとの連合の形成に合意すると発表、サドル派幹部は、INA とイラーキーヤの連合からは、法治国家同盟とマーリキー首相を排除すると主張した [Wasaf 12 Aug 2010; Nūn 13 Aug 2010]。こうして、国民同盟内の首班指名交渉が暗礁に乗り上げたことで、まず法治国家同盟とイラーキーヤが接近し、その交渉が決裂すると、次は INA とイラーキーヤが連合形成の直前まで交渉をまとめたのである。

ところが、INA とイラーキーヤがマーリキー首相を外した連合を形成すると、米国とイランの介入がはじまった。米国は、4年間の任期中にとりわけ治安の安定に大きく貢献したマーリキー首相を外した政権の形成を批判し、マーリキー首相の続投を支援することを明言した [S 19 Aug 2010]。9月にはバイデン副大統領とゲーツ国防省がバグダードを訪問し、改めてマーリキー首相とアッラーウィーの権力分有体制を支持する考えを示した [N 4 Sep 2010] ⁷。一方でイラン政府は、法治国家同盟と INA の「シーア派同盟」を維持するために、マーリキー首相の続投を国民同盟全体で支援するように呼びかけた⁸。ここには、①敵対的と言われる米国とイランが、別々の利害関係に基づいて同じ主張を行うようになった点、②これまで親 ISCI、反マーリキーの姿勢を維持してきたイラン政府が、ISCI ではなくマーリキー首相を推すようになった点で、二重のねじれ現象が見られる。

かくして、これまでの合従連衡プロセスは再び振り出しに戻った。袋小路に陥った政治エリートは再び、最少勝利連合ではなく、4政党連合が参加する挙国一致内閣の形成を主張するようになった。ここに、権力分有の方法が重要な争点となり、新たに「トロイカ+1論」が出現した。従来の「トロイカ論」で主張された大統領、首相、国会議長の3ポストでは、四つの政党連合に配分できない。これを克服するために、「トロイカ+1論」では、国家安全保障政治評議会という既存ポストの権限を拡大した戦略政治国民評議会 (al-Majlis al-Waṭanī li-Siyāsāt al-Istrāṭijīyāt; 以下、政治評議会) ポストを新設することを唱える [INA 23 Aug 2010; al-Hayāt 27 Aug 2010]。四つの政党連合に四つの最重要ポストを一つずつ配分しよう、というわけである。

3. 新たな「2極構造」の出現——INA の分裂と合意形成 (9月3日～11月10日)

国民同盟内の交渉が膠着し、外部介入によって INA とイラーキーヤの連合が頓挫したイラクでは、袋小路を打開するために、ISCI が次なる一手を打った。ISCI は9月3日、突如として、これまで明確にしてこなかった INA の首班指名候補にアーデイル・アブドゥルマフディー副大統領 (ISCI 幹部) を指名すると発表したのである⁹。この決定の背景には、直前のバイデン、ゲーツ訪問によって、マーリキー首相とアッ

ラーウィーの権力分有に基づく新政権が形成される可能性に、INA が強い危機感を抱いたことがあった。マリーキー首相指名への対抗馬として、アブドゥルマフディーを選定したのである。INA のアブドゥルマフディー指名から 11 月までの約 2 か月は、INA 分裂によって政党間のパワーバランスが崩壊し、新たな「2 極構造」が成立したことで新政権形成の合意につながった時期である。具体的にみていこう。

膠着状態打開のために取った ISCI のアブドゥルマフディー指名は、結果的に逆効果となり、INA の分裂を引き起こした。ジャアファリー率いる国民改革同盟とサドル派が、ISCI の決定を批判し、マリーキー首相の首班指名支持に回ったからである。ジャアファリーは、ISCI による一方的なアブドゥルマフディー首班指名の決定は民主的ではないと批判し、今後はマリーキー首班指名を支援することを発表した [N 7 Sep 2010]¹⁰。ジャアファリーに続き、サドル派の N.ルバイイー国会代表は、「マリーキー首相は最大会派を率いる人物であり、なんびとも首班指名から排除することはできない」と述べて、マリーキー首相の首班指名を支持することを初めて明言した [Wasaf 28 Sep 2010; N 29 Sep 2010]。

では、あれほど強固な反マリーキー姿勢を取っていたサドル派が、ここにきてなぜ政策を変更し、マリーキー支持に回ったのだろうか。もちろんそれには理由があった。それは第 1 に、サドル派の精神的指導者とされるイラン・コム在住のカーズィム・ハーイリーが、ムクタダーに対してマリーキー首班指名を支持するように圧力をかけたためである [al-Hayāt 21 Sep 2010]¹¹。第 2 に、4 月に行った首班指名をめぐる独自の住民投票で、2%を獲得して 8 位にとどまったアブドゥルマフディーを支持することは、サドル派自身の正当性にかかわる問題だからである。

そして、米国、イラン、シリアもまた、マリーキー首班指名を支持した [Wasaf 13 Sep 2010]。2009 年末以降マリーキー首相と対立を続けたシリアに対しては、法治国家同盟の派遣団がダマスカスでアサド大統領と会談し、利害関係の調整とともに、マリーキー首相の首班指名への支持を取り付けた [N 15 Sep 2010]。

この流れに乗った法治国家同盟、サドル派、ジャアファリーの改革潮流を中心とする国民同盟は、10 月 1 日深夜、ISCI 不在のまま、正式にマリーキー首相を首班指名候補に選定することを発表した。マリーキー首班指名は全会一致で合意されたが、ISCI とファディーラ党が会議をボイコットした [al-Hayāt 2 Oct 2010]。マリーキー首相は、新政権が治安機関の再編・強化、宗教・宗派・民族の差別の解消、真の国民和解政策の徹底に力を入れることを明言する所信表明演説を行った [N 3 Oct 2010]。

ところで、以上の INA 分裂によるパワーバランスの変化において、キングメーカーとなったのは、間違いなくサドル派である。言い換えれば、最大会派としての国民同盟の枠組みでマリーキー首班指名を発表できたのは、サドル派がマリーキー支持に転向したからである。これは、サドル派の B.アアラジー政治局長の「サドル派こそがマリーキー首相に続投の機会を与えた」[N 21 Oct 2010] との発言に端的に表れてい

る。このことは、新政権でサドル派の影響力が実力以上に拡大することを意味している。現にサドル派幹部は、単独政党として最大議席を持つ同派が、新政権で内務省などの主要ポストを掌握する権利を有していると喝破している [N 11 Oct 2010]。ISCI のアブドゥルマフディー首班指名候補の選定に起因するサドル派の離反こそが、マリーキー首班指名の流れを決定的にしたのである。

こうして最大会派の国民同盟がマリーキー首相の首班指名を正式に発表したことで、窮地に追いやられた INA とイラーキーヤは、7 月以来の連携を強化した。イラーキーヤの幹部はヨルダンのアンマンに集まって協議し、ISCI のアブドゥルマフディー首班指名を支持する考えを示した。アブドゥルマフディーを首相に、アッラーウィーを大統領に任命し、ISCI とイラーキーヤの連合に他の小規模政党を取り込んで、国民同盟に対抗しようというわけである [al-Hayāt 22 Sep 2010; WIA 2 Oct 2010]。

一方で、ISCI とイラーキーヤの接近を横目に、マリーキー首相は着々と首班指名への支持を固めていった。これまで姿勢を曖昧にしてきたクルド同盟は、イラーキーヤとの連合を否定し¹²、マリーキー首相の首班指名を支持することを選挙後初めて明言した [RN 2 Oct 2010; WASA 2 Oct 2010]。そして、キャスティング・ヴォートを握っていると自負したクルド同盟は、マリーキー首班指名支持の条件として、憲法第 140 条の適用などクルド人の利害を集約した 19 の条件を提示し¹³、マリーキー首相に承認させた [N 10 Oct 2010]。クルド同盟の戦略的勝利である。それに加えて、イラク合意戦線とイラク統一同盟が統合して中道連合 (Tahāḥuf al-Wasaf) を形成、国民同盟と連立し、マリーキー首班指名を支持することを発表した [N 12 Oct 2010]。合意戦線などの小規模政党は、この時点までどの政党と連合するかを明示せず、主要政党の合従連衡プロセスを慎重に観察してきた。だが、中道連合が持つわずか 10 議席でも、首班指名にとって大きな意味を持つようになってきた。ゆえに、クルド同盟と中道連合は、明らかに多数派になったマリーキー首相の首班指名支持に回ったのである。

かくして、マリーキー首班指名を支持する大多数の勢力と、ISCI とイラーキーヤの連合という新たな「2 極構造」が出現した。図表 3 に示した合従連衡にしたがうと、②から③の状態に連合が再編された。

アンバランスな「2 極構造」が成立すると、首班指名候補者の輩出が非現実的となったイラーキーヤ側は、大統領や国会議長をはじめとする重要ポストを可能な限り獲得する戦略へとシフトした。マリーキー首班指名の受け入れ条件として、イラーキーヤが政策決定の 50% の権限を確保することを要請したのである [S 16 Oct 2010]。一方で最高裁は、10 月 24 日、地元 NGO が原告となっていた裁判で、7 月 14 日以降の「憲政上の空白」に対して違憲判決を下し、早急に通常国会を召集して組閣を進めるように命じた [al-Hayāt 25 Oct]。

「2 極構造」の成立と最高裁の違憲判決を受けて、各政党の指導者は、クルド同盟のマスウード・バールザーニーの呼びかけに従って、11 月 8 日、イルビール会議に集

結した。同会議では、イラーキーヤが、国会議長、政治評議会議長、国防省などのポストと引き換えに首相と大統領ポストを譲歩することを、原則合意した〔*al-Hayāt* 9 Nov 2010〕。同時にイラーキーヤは、治安と政治決定における大きな権限を政治評議会に付与することを新政権への参加条件とした〔*Wasafī* 11 Nov 2010〕。こうして、争点、首相と政治評議会のあいだの権限の配分、言い換えれば「パッケージ解決」に基づく「トロイカ+1」体制の是非にシフトした。結果的に、政治評議会は「アッラーウィーを議長に 20 名のメンバーで構成され、安全保障や外交政策などの国家の運命を左右する重要な問題を協議する。マーリキー首相もメンバーとして参加する」〔*SA* 12 Nov 2010〕ことで原則合意したが、どの程度の権限を付与するのかという具体的な点は明確にされず、曖昧なまま残された。かくして、11 月 11 日の国会で、ターラバーニー大統領、マーリキー首相、ヌジャイフィー国会議長、アッラーウィー政治評議会議長を中心とする新政権の形成が合意され、組閣のめどが立ったのである。

Ⅲ. 選挙後危機の収束——権力分有体制の成立

1. なぜ憲政上の空白が 8 カ月以上も続いたのか？

では、新政権形成の合意までに、なぜこれほどの時間がかかったのだろうか。以上で概観した合従連衡の政治ゲームからは、次の二つの争点をめぐって妥協が難航し、そこに三つ目の要素として外部介入が加わったためだと整理できる。

第 1 に、パッケージ解決に妥協形成が困難だったためである。上述の通り、「パッケージ解決論」は法治国家同盟と INA の交渉のなかで生まれたが、イラーキーヤもマーリキー政権後半に拡大した首相府の権限を縮小することを支持した〔*al-Hayāt* 15 Sep 2010〕。これに対して、マーリキー首相は、既存の首相権限は憲法の規定通りであり、その権限を縮小するには憲法レベルの改定が必要になると主張した〔*al-Hayāt* 12 Sep 2010〕。パッケージ解決は憲法改正と同義だ、というわけだ。なるほど憲法第 78 条には、首相は政治執行の最高責任者であり、軍部の最高司令官であるとの規定が存在する。だが、ISCI とイラーキーヤはその規定を改定しても、首相の権限を縮小するべきだと主張した〔*WIA* 18 Oct 2010; *al-Hayāt* 10 Nov 2010〕。つまり、首相人事と同時に首相の権限も協議・決定しなければならなかったことが、交渉を難航させ、新政権の形成を遅らせた。

第 2 に、「トロイカ+1」のポストをめぐって各政党が争奪戦を展開し、妥協案が形成できなかったからである。上述の通り、大統領、首相、国会議長のトロイカ体制に加え、政治評議会ポストを新設し、縮小した首相権限を委譲することが合意されるまで、長い合従連衡による多数派形成が必要となった。結局、政治評議会の権限は明確に規定されないまま、そのポスト新設だけが原則合意された。ゆえに、閣僚ポストの配分段階でも、政治評議会の権限をめぐる対立が継続することとなった¹⁴。

第 3 に、以上のような多数派形成と権力争奪のゲームに、多様な利害関係を持った

外部アクターが介入し、交渉を混乱させたからである。「シーア派同盟」再構築期にはイランの介入が目立ち、同盟再編期には、米国とイランが INA とイラーキーヤの連合形成に歯止めをかけた。INA によるアブドゥルマフディー首班指名も、米国がマーリキー首相とアッラーウィーの連合を纏めるために介入したことへの反発だった。このように、「シーア派同盟」の継続によって影響力を維持したいイランと、あくまでもマーリキー首相とアッラーウィーの権力分有に固執する米国の介入は、合従連衡のプロセスを混乱させ、イラク国内のパワーバランスを変化させてきた。以上の三つの要素が複合的に作用し、選挙後の新政権の形成を延滞させたのである。

にもかかわらず、新政権の主要ポストが合意され、組閣のめどが立ったのはなぜなのか。それは第 1 に、マーリキー率いる国民同盟が「2 極構造」の成立によって明確な多数派を形成し、有利な形で権限を配分（組閣）できるようになったためである。第 2 に、「2 極構造」によって少数派に転落し、様々な離反勢力が出現したイラーキーヤ（および ISCI）が¹⁵、権限の配分を条件に政治評議会と国会議長のポストを承認せざるを得なかったからである。イラーキーヤと ISCI は、双方の票を合わせても 100 議席に届かず、新政権を主導することは不可能であった。第 3 に、国民同盟もイラーキーヤも、政治評議会の権限を曖昧にしておくことで、新政権形成の合意を優先させたからである¹⁶。言い換えると、「トロイカ+1」に配分する明確な権限の議論を先送りすることで、新政権形成の原則合意を達成したのである。

2. 分有された権力——調整型の政権と脱バース党政策

さて、11 月 11 日の国会で合意された新政権の特徴は、三つに整理できるだろう。

第 1 に、権力分有と調整型の政権となった。合従連衡のプロセスからも明らかのように、マーリキー首相の続投には、①サドル派の政策転換が不可欠であり、②その後のクルド同盟の支持が必要であった。したがって、ISCI のハンムーディー政治局長を抑えてサドル派のクサイ・スヘイルが国会第 1 副議長に任命されたことが示しているように〔*S* 12 Nov 2010〕、新政権でサドル派の発言力が必然的に高まることになる。クルド同盟も同様に、利害の拡大を要求するだろう。さらに、③イラーキーヤが、アッラーウィー政治評議会議長、ヌジャイフィー国会議長に加え、多くの重要ポストを獲得する見込みである。それゆえ、マーリキー新政権は、権力分有体制であることに加え、各派の利害関係を調整するメカニズム構築の必要に迫られることになる（図表 4）。

第 2 に、イラーキーヤが権限を拡大したことは、係争地をめぐってクルド同盟との対立が激化することを意味する。国会議長に就任したヌジャイフィーは、対クルド強硬派である。新政権では、中央地方関係の調整を進めることが不可欠となるだろう。

第 3 に、権力分有体制下でイラーキーヤが権限を拡大したことは、前政権下で進められた脱バース党政策が大きな転換を迎えることを意味する。そもそも 3 月の国会選

挙で主要な争点になったのは、脱バース政策であった〔山尾 2010〕。11 日の国会でも、イラーキーヤは大統領・首相の承認条件として、サーリフ・ムトラクやザーフィル・アーニーら同派幹部への脱バース党法適用を取り下げを挙げ、新政権では脱バース党法の見直しを進めると明言した〔S 12 Nov 2010; *al-Hayāt* 16 Nov 2010〕。脱バース政策に強く反対するムトラクやアッラーウィーが政権の中核に参入したことで、今後は旧バース党員の復帰政策が進み、その過程で政策対立が激化することになるだろう。

【図表 4：新政権（挙国一致内閣）の首脳メンバー】

閣僚ポスト	閣僚	政党連合	所属政党	注記
大統領	ジャラル・タラバーニー	KA	PUK	PUK 党首、クルド人、前大統領
首相	ヌーリー・マリーキー	SLA	ダアワ党	ダアワ党党首、シーア派、前首相
政治評議会	イヤー・アッラーウィー	IRQY	イラク・リスト	イラク・リスト党首、シーア派、元首相(2004-05 年)
国会議長	ウサーマ・ヌジャイフィー	IRQY	ハドゥンバー	モスル出身のスナ派、対クルド強硬派
国会第 1 副議長	クサイス・ヘイル	INA	サドル派	サドル派解放ブロックの幹部、シーア派
国会第 2 副議長	アーリフ・タイフル	KA	KDP	キルクーク県当選、クルド同盟幹部、クルド人

〔出所〕〔N 11 Nov 2010; S 11 Nov 2010; MN 12 Nov 2010; *al-Hayāt* 12 Nov 2010〕をもとに、筆者作成。

IV. おわりに

3 月の国会選挙でいずれの政党連合も過半数の議席を獲得できなかったことは、多数派形成のための政治ゲームの開始に直結した。本稿で整理してきたように、合従連衡に基づく多数派形成ゲームの過程で、①首班指名の人事と首相の権限の縮小をパッケージ解決すること、②制限した首相権限を四つのポストで配分する制度を構築すること、の 2 点をめぐって交渉が難航し、③そこに多様な利害を持つ外部アクターが介入することによってさらに交渉が混乱した。かくして、新政権の形成は 8 か月以上も遅れることとなった。

本稿で整理した合従連衡のプロセスは、民意とはかけ離れた政治エリートのゲームである。だが、それは、イラク人による新たな制度の創造と定着、民主主義の進展の観点からは重要なプロセスであった。その結果、次の二つのことがもたらされた。

第 1 に、政党間の連合の組み替えによって自派の利益を引き出ししていくという政党政治が定着した。マリーキー首相率いる法治国家同盟は、3 月の国会選挙における「カウンター・インティファダ」〔山尾 2010〕によって権限の配分を余儀なくされたが、8 か月以上にも及ぶ交渉によって首相ポストを維持した。イラーキーヤは、首相ポストこそ逃したが、政治評議会をはじめとする大きな権限を獲得することに成功し、権力分有体制の定着に寄与した。サドル派、クルド同盟、中道連合は、政党間のパワーバランスを揺るがすインパクトを持つ再編をどのタイミングで行うべきかを学んだ。多党制の進行と票の分散という状況で、合従連衡によって利害の最大化を図るという政治の仕組みを定着させたのである。

第 2 に、「パッケージ解決論」や「トロイカ+1 論」に見られるように、権力分有のシステムを議論し、まがりなりにも最終的に制度を作り上げた。この権力分有の制度構築の試みは、政党連合を再編して多数派を形成しつつ、そこで導出された利益をもとに権力を配分し、最終的にはそれを分有していくという「イラク型民主主義」の定着において、極めて重要な実験だったのである。

合意された新政権首脳陣の構成をみると、合従連衡によって引き出された利益に基づいた権力分有システムが構築されたことが分かる。多様な政策志向を持つ政党連合に権限が配分されたことで、今後は政策（とりわけ脱バース政策）をめぐる対立が激化することになる。これは、短期的には効率的な政策過程を阻害するものになるが、政策のすり合わせによる政治決定の進展という観点からは、長期的に見ると民主化の定着にとって重要な前進となるだろう。だが、8 か月以上にわたるエリートの政治ゲームによって失われた国民の政治に対する信頼を回復することが、より優先されるべき課題なのかもしれない。組閣のめどが立ったことは、政治闘争の終焉を意味しない。それは、今後 4 年間の政治対立の始まりに過ぎないのである。

(2010 年 11 月 30 日脱稿)

<引用文献>

- DM: *Dawla al-Muwāḥḥin* (Web版 <http://www.iqrnta.com/new/>)
al-Hayāt (Web版 <http://www.daralhayat.com/>)
 INA: *Wikāla Anbā' al-I'lām al-'Irāqī* (Web版 <http://al-iraqnews.net/new/>)
 MN: *Mawsū'a al-Nahrayn* (Web版 <http://www.nahrain.com/>)
 MT: *al-Muwāḥḥin Taimuz* (Web版 <http://www.almowatennews.com/>)
 N: *Wikāla al-Nakhīl li-l-Anbā'* (Web版 <http://www.nakhelnews.com/>)
 Nūn (Web版 <http://non14.net/>)
 RD: *Rāḍiyū Dijla* (Web版 <http://www.radiodijla.com/>)
 RN: *Rāḍiyū Nawā* (Web版 <http://radionawa.com/ar/>)
 S: *al-Sūmāliya* (Web版 <http://www.alsumaria.tv/en/home.html>)
 SA: *al-Sharq al-Awsaṭ* (Web版 <http://www.asharqalawsat.com/>)
 WASA: *Wikāla Anbā' Shaṭṭ al-'Arab* (Web版 <http://www.shatnews.com/>)
 Wasaṭ (Web版 <http://wasatonline.com/>)
 WIA: *Wikāla al-'Irāq li-l-Anbā'* (Web版 <http://iraqmc.com/>)
 Z: *al-Zamān* (Web版 <http://www.azzaman.com/>)

ICG: International Crisis Group. 2010. *Loose Ends: Iraq's Security Forces between U.S. Drawdown and Withdrawal*, No. 99, 26 October 2010.

山尾大 2010 「イラク国会選挙（2010 年 3 月 7 日）と分極化するイラク政治」『中東研

筆者略歴

山尾 大 (やまお だい)

九州大学大学院比較社会文化研究院講師。京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究
研究科博士課程修了、京都大学博士（地域研究）。日本学術振興会特別研究員（PD）
を経て現職。主要論文に、“An Islamist Social Movement under the Authoritarian Regime in
Iraq during 1990s: A Study on the Shi'ite Leadership of Šādiq al-Šadr and its Socio and its
Socio-political Base”, *AJAMES*, 25 (1), pp. 1-29, 2009 年、「政党の合従連衡がもたらす宗
派対立の回避——戦後イラクの政党政治と権力闘争（2003 年～2008 年 8 月）——」
佐藤章（編）『新興民主主義国における政党の動態と変容』アジア経済研究所, pp.
101-132, 2010 年などがある。

¹ INA 内の各政党の議席獲得率については、[山尾 2010: 74] を参照のこと。

² 第 3 位から順に、サドル派のクサイ・スヘイル（17%）、マリーキー首相（10%）、アッラーウ
イー（9%）、サドル派のビハーウ・アラジャ（5%）、INC のアフマド・チャラビー（3%）、ISCI
のアーディル・アブドゥルマフディー（2%）と続いた [al-Hayāt 8 Apr 2010]。

³ サドル派の B.アラジャ政治局長は、INA を排除した新政権の形成は不可能であると主張し、
イラーキーヤと法治国家同盟の交渉を牽制した [DM 23 Apr 2010]。

⁴ ここでも、首班指名と首相の権限縮小をパッケージで解決しようとした [al-Hayāt 19 Jun 2010]。

⁵ 加えて、INA 内部からは、米国の支援を受けたマリーキー首相とアッラーウイーの交渉を、ワ
シントンによる内政介入であると強く批判する意見が噴出した [al-Hayāt 11 Jul 2010]。

⁶ イラク憲法では、選挙結果の承認後 15 日以内に第 1 回国会を召集し、その後 30 日以内に大統領
を選出、選出された大統領は 15 日以内に最大会派から首相を任命し、任命された首相が 30 日
以内に組閣を行うという規定がある（憲法第 54、55、76 条）。

⁷ バイデン副大統領とゲーツ国防相の訪問は、8 月末の米軍戦闘部隊撤退後の政権運営を協議す
ることが目的であった。米軍の撤退に関しては、[ICG 2010] 参照。

⁸ これに対して、サドル派幹部は、テヘランがマリーキー首相を推し続けるのであれば、サドル
派の拠点をイランから撤退すると批判した [S4 23 Aug 2010]。

⁹ INA のハーディー・アーミリー（バドル軍団司令官）は、INA の公式首班指名候補として A.
アブドゥルマフディーをたて、法治国家同盟のマリーキー首相と協議したうえで、国民同盟の
枠内で首班指名候補を 1 人に絞ることを強調した [INA 4 Sep 2010]。

¹⁰ これに対して、法治国家同盟は、元ダアワ党幹部であったジャアファリーが、マリーキー首相
の首班指名の支持に回るのであれば、ダアワ党幹部への復帰のために党幹部のポジションをジャ
アファリーに準備すると主張し、ジャアファリーの決定を歓迎した [W4S4 8 Sep 2010]。

¹¹ ハーイリーは、ムクタダーの師匠に当たり、サドル派に一定の影響を持つシーア派宗教界の
法學權威である。ハーイリーは 7 月にも、①米軍の撤退を 2011 年末までに完成させること、②
拘束中のサドル派の囚人を全員釈放することを条件に、マリーキー首相の首班指名を支持する考
えを示していた [al-Hayāt 17 Jul 2010]。

¹² イラーキーヤに加盟し、とりわけ北部のニーナワール県で票を伸ばしたハドゥバーは、モスル、
キルクークなどの係争地でアラブ人勢力の権益を主張して大きな支持を獲得した。係争地でのア
ラブ人の権益とは、クルド同盟の権限拡大を阻止することである。イラーキーヤは、ハドゥバー
などの対クルド強硬派が中心勢力になっているがゆえに、クルド同盟との政策的な妥協が困難に

なる。各政党連合の政策やイデオロギーの詳細については、[山尾 2010] の図表 3 を参照のこと。

¹³ 具体的には、連邦制の尊重、地方政府への権限の委譲、第 140 条の適用、石油開発の権利、石
油法の改正・承認、ペシュメルガの国軍への再編、クルド同盟からの大統領の任命などがクルド
同盟のマリーキー首相の首班指名支持の条件に挙げられた。詳細は、[Wasaf 7 Oct 2010] を参照
のこと。

¹⁴ アッラーウィーは、政治評議会は 100 人以上のアドバイザー、SP などのスタッフで構成され
る巨大な組織にするとの方針を示す一方で、国民同盟の幹部は、政治評議会の組織構成には国会
の承認が必要だとして、アッラーウィーの政策を批判した [N 14 Nov 2010]。本稿脱稿段階では、
①政治評議会が執政権を有するか否か、②意思決定は全会一致か、8 割か、絶対多数かをめぐる
論争が継続している [al-Hayāt 29 Nov 2010]。

¹⁵ 党議拘束が弱いイラーキーヤは、常に離反組の存在が報道されてきた。例えば、イラーキーヤ
に加盟する 35 人の議員が同派を離脱し、マリーキー首相の首班指名支持に回ったと報道された
[N 18 Oct 2010]。その中心人物であるタラール・ズービーイー幹部は、マリーキー首班指名の支持
を明言した後、武装勢力に事務所を数回襲撃された [N 10 Nov 2010]。ISIC も同様に、離反組が
出現した。A.ハキーム議長がマリーキー首班指名に反対してイラーキーヤとの連合を進めている
にもかかわらず、ISCI 民兵組織バドル軍団（H.アーミリーが指導）は、イラーキーヤとの連合を
否定、あくまでも国民同盟の枠組みの維持を主張した [al-Hayāt 20 Oct 2010]。バドル軍団は、最
終的にマリーキー首相支持に回った [MN 11 Nov 2010]。

¹⁶ 11 月 11 日の国会前にボイコットを主張していたイラーキーヤに対して、オバマ米大統領が直
接電話会談でボイコットの停止の圧力をかけた、との報道もある [al-Hayāt 12 Nov 2010]。